

1月2日のウクライナ情報

安齋育郎

●「破滅的な結果」。ウクライナのミサイルがベラルーシを攻撃(2022年12月30日)

ウクライナの S-300 対空ミサイルがベラルーシを直撃した。ベラルーシ外務省は現在、ウクライナに「破滅的な結果」を警告している。

ミンスク国防省によると、死傷者は出ていない。現在、ベラルーシの防空ミサイルが発射されたのか、それとも流れ弾なのか、調査が進められている。ミンスク外務省の公式声明によると、ベラルーシ側はウクライナに対し、「ミサイル発射の状況を遅滞なく徹底的に調査し、責任者を処罰するとともに、破滅的な結果をもたらす可能性のあるこのような事故を将来にわたって防止するための包括的措置をとる」よう要求しています。



●ジャッジ・アンドリュウ・ナポリターノとダグラス・マクレガー' 2022年12月8日)

ジャッジ: みなさん、こんにちは。ジャッジング・フリーダムのジャッジ・アンドリュウ・ナポリターノです。2022年12月8日(木)、アメリカ合衆国東海岸時午後三時を少し回ったところです。今日のゲストはダグラス・マクレガー大佐です。大佐、今日は話をすることがたくさんあります。

まず、ここからスタートしましょう。アメリカ合衆国国務長官アントニー・ブリンケンが昨日、ウォール・ストリート・ジャーナルにアメリカ合衆国公式政策として、「ロシアには2月24日以前の位置まで軍を撤退させることを必要条件とする」という声明を載せました。

ロシアを完全に特別軍事作戦開始以前の位置まで戻す、つまりウクライナから完全撤退させるという意味です。彼の言っている事にどれほどの現実性があるのでしょうか？また、アメリカ合衆国の公式な政策として国務長官の口からそのような声明を発表させることは賢明だと言えるのでしょうか？

マクレガー大佐: つまり、ブリンケンは、彼が今までずっと引き継いできたように、「これからもロシアとは金輪際、交渉するつもりはない」と言いたかったのです。ロシアが2月24日以前の位置まで戻ることが絶対にありえないことをブリンケン自身がよく知っているからです。

ジャッジ: しかし、それは現実的ですか？今後も NATO やアメリカ合衆国が、ロシアにそのあり得ない条件を飲ませるためにドルを注ぎ続けることにどんな合理性があるのでしょうか？ロシア軍を2月24日以前の位置まで戻すということの本気でゴールに考えているのでしょうか？

大佐: 絶対に起こり得ない夢幻(ユメマボロシ)。注意を向ける価値の全くないタワゴトです。

ジャッジ: オーケー。最近、大佐はオフレコで私にプーチン大統領が述べたたいへん興味深い声明について言いました。少なくとも私はたいへん興味深いと思いました。視聴者もそう感じていると思い

ます。

ジャッジ:核兵器使用についてプーチンは言及していたからです。プーチン大統領の声明は、アメリカの公式核兵器使用政策とどのように関わってくるのでしょうか？

大佐:プーチンは「ロシアは自国が核攻撃を受けない限り、核兵器を使用することはない。核兵器の先制的使用はない」という 6 月以前から言い続けている声明をそこでも繰り返したのに過ぎません。それは逆に言うと、「もし、核攻撃を受けたら、ロシアは核攻撃で報復する」という意味です。つまり、プーチンはもう一度念をおしたのです。なぜ、そこで彼が念を押したのかという理由ですが、それはバイデンが、戦後のアメリカ歴代大統領たちが連綿と引き継いできた伝統「アメリカは自国が核攻撃を受けない限り、核兵器を使用することはない。核兵器の先制的使用はない」というポリシーをあっさり撤回したからです。バイデンは「アメリカはたとえ自国が核攻撃を受けていなくても、核兵器を先制的に使用する場合がある。通常兵器使用に対して核兵器を使用する可能性がある。攻撃を受けていなくても核兵器を使用する可能性がある」と述べたのです。

ジャッジ:ちょっと、待ってください。それは非常に危険なことではないのですか？

大佐:ところが、それがアメリカ合衆国大統領が公式に署名し、公表した声明なのです。「核の先制使用」がアメリカ合衆国の新・基本方針になったのです。ワシントンの中でいったい誰の入れ知恵か知りませんが、本当に狂気に満ちていますね。信じられないことに、ワシントンでは少し以前から「戦略的核相互攻撃や限定的核戦争による勝利」といったナンセンスが誰が言うともなく囁かれていたのです。

ジャッジ:その問題が真剣な議論を求めてニューヨークタイムズのフロントページに書かれるとは、私は思いません。しかし、このアメリカの政策の一大転換についてプーチン大統領はなんと反応するのでしょうか？

大佐:それについては、もう一步踏み込んで答えることにしましょう。

「もし、核攻撃を受けたら、ロシアは核攻撃で報復する」と再度プーチンに言わしめた現実的な事件が実はもうあちこちで起きています。

夥しい数の核弾頭を搭載したアメリカの弾道ミサイル、爆撃機、空母戦闘群(CVBG)が、アドリア海と東地中海に集結しています。ドイツでもその動きが見られます。ですからプーチンは「ロシアは核弾頭が着弾するまでのんびり待ってはいない。アメリカとその同盟国が弾道ミサイルや爆撃機に核弾頭を搭載したと察知した時点で、ロシアはそれを自国への核攻撃が実行されたものとみなし、核兵器による反撃を開始する」と警告したのです。非常にゾッとさせる現実的段階に入ってきました。ロシアは「先制核攻撃を受けたかどうかはロシア自身が判断する。アメリカとその同盟がいつでも発射ボタンを押せる段階まで準備を完了した時、ロシアはそれを核攻撃開始と見做し、こちらから核攻撃を開始する」と言っているのです。

ジャッジ:大佐、第三次世界大戦はもう始まったのでしょうか？

大佐:いや、まだです。現在、アメリカ合衆国とロシアの間で代理戦争が進行中です。そしてヨーロッパ諸国がそこに巻き込まれています。ポーランドのように自ら進んで熱心に巻き込まれてくる国もあれば、嫌々ながらという国もありますが、世界規模の大戦争にはまだ至っていません。

ただ、私がここで言っているのは、私たちがこの道をこのまま歩み続け、ロシアに対して「私たちは核兵器を準備している」というシグナルを送り続けたなら、その後には待っているのはアルマゲドンだということです。

ジャッジ:先週、大佐が書いたコラムですが、いつものように大佐の歴史的蘊蓄が散りばめられていました。アメリカの指導者が歴史の苦い失敗から学んだ教訓が書いてありました。それは「アメリカは

その国家戦略として、ロシアとの直接戦争は絶対に避ける」という教訓です。もう、その時代は終わったのでしょうか？もう、通用しなくなってしまったのでしょうか？アントニー・ブリンケンが昨日、ウォール・ストリート・ジャーナルに語ったことは、つまりそう言う事なののでしょうか？

大佐:冷戦時代終結までのアメリカの核兵器政策は一にも二にも「抑止」でした。二大核大国が直接戦争を始めたら、それは核戦争に発展する、つまり即、人類の滅亡を意味することをじゅうぶん承知していたからです。それゆえ、戦後歴代アメリカ合衆国大統領が一貫して貫いてきた政策は「アメリカはロシア(ソ連)に対して直接戦争を始めない」ということでした。そしてそれをロシア(ソ連)に向かってはっきりと主張してきました。

「ロシア(ソ連)がアメリカを攻撃して来なければアメリカもロシアを攻撃しない」ということです。実際に、私たちにはこれまで核戦争による人類滅亡の危機を間一髪のところまで防いできた歴史があります。その中のいくつかはよく知られていますが、全く知られていないものもあります。

しかし、「核の先制攻撃はしない」という根本だけはしっかりと守られてきたのです。ところが、バイデンがそれをあっさりと破棄してしまいました。しかし、その起源はバイデンよりもずっと前に遡ります。ソ連崩壊により、アメリカは唯一の超大国になりました。その時、誰もアメリカに力で対抗できなくなりました。ところがアメリカはその機会を「これで戦争は無くなった。世界は平和になった」とは解釈せず「これからはいつでもどこでも好きなだけイジメたいヤツをイジメられるし、それには誰にも文句を言わせない」と解釈したのです。そしてかなり長い間、その悪行を繰り返してきました。ところが、今、ロシアが敢然と立ち上がってアメリカの前に一線を引いた。そして「アメリカはもうロシアをイジめることはできない」と言ったのです。

ジャッジ:確か 5、6ヶ月前だったと思うのですが、バイデン大統領がワルシャワで演説しました。その演説を聞いて大佐は、「バイデンは感情で頭がカッカし、『地球全体を道徳化する(moralizing globalism)』というイデオロギーの泥沼に嵌り込んでいる」と解説しました。『地球全体を道徳化する(moralizing globalism)』とはいったいどういう意味でしょうか？

大佐:それは「アメリカの道徳は、地球上の他の誰の道徳よりも卓越し、優越している」という考えです。それゆえ「アメリカに従わない考えはなんであれ誰であれ、たとえ気候変動であれ、国境解放論であれ、文化的マルクス主義であれ、全て悪であり、邪悪の極みとして取り扱われなければならない」というものです。これが moralizing globalism の真髄です。

ジャッジ:そして、彼らネオコン・グローバリストたちはそのためにアメリカ人は血を流さなければならないと言っているのでしょうか？アメリカ合衆国国務長官アントニー・ブリンケンが昨日、ウォール・ストリート・ジャーナルに語ったことの真髄なののでしょうか？

大佐:ジャッジの分析は非常に正確だと私は思います。

ジャッジ:オーケー。また大佐はこうも書きました。少し長いですが、ここで引用します。つい先週、大佐が書いたコラムからの引用です。

「ロシア軍 54 万が南ウクライナと西ロシアとベラルーシに集結している。その数は日増しに増えている。それは 1 千基のロケット・アーテラリー・システムと数千基戦略的弾道ミサイル、ドローンと五千両の装甲車と 1 万 1 千両の戦車と数百機の無人戦闘ヘリコプターと爆撃機で完全武装している。」

大佐:戦車 150 両です。

ジャッジ:オーケー。さらに大佐は「これは最も控えめに見積もった数字だ。現在のロシア軍は 2 月 24 日の特別軍事作戦でロシアが派遣した軍事力とは比較にならないほど増強されている」と書きました。つまり、ここに至ってついにプーチンは本気になった。そして完全武装した 54 万の軍隊を整え

た。アメリカであれ、ポーランドであれ、どこであれ、それに対抗できる者はいない、ということでしょうか？

大佐: 軍事的にロシアに対抗するのは不可能です。しかし、ロシアに対し、こちらから一切の条件を要求しないという前提でならば、交渉することは可能です。ロシアが2月24日以前の位置まで完全撤退というナンセンスは一切持ち出さないことが重要です。

ジャッジ: そんなものを持ち出して、ロシアとの交渉は不可能ですね。

大佐: 絶対に不可能です。ウクライナ完全崩壊を避けたいならば、ここでロシアの要求を無条件で受け入れなければなりません。先ほど、私が述べたように、ロシアの大軍を乗せた列車が、南ウクライナ、西ロシア、ベラルーシに向かって走っています。そして移動はすでにほとんど完了しているようです。54万はおそらく今では60万にまで増えていることでしょう。もちろん、これらの大軍は衛星システムによる情報提供を受けており、地上の状況を同時刻で知ることができるのです。

ジャッジ: これはロシア軍が発表したことですが、ウクライナのドローンがロシア領内の燃料貯蔵施設を攻撃し、ロシア軍側に死者が出たとあります。アメリカの情報局がこの事件に関係していたと私は思いますが、もし、間違っていたら訂正してください。アメリカ情報局はロシアのみならずウクライナもスパイしているはずなので、ウクライナ軍のこの動きを事前に知っていたと思うのですが、ウクライナがロシア領内でドローン攻撃を行う計画を実際にホワイトハウスは知っていたのでしょうか？知っていて、それにゴーサインしたのでしょうか？

大佐: 事件の詳細は時の経過とともにだんだん明らかになっていくでしょう。この攻撃による被害は些少なものでしたが、しかし、人が死んだことは確かです。

ジャッジ: ロシア人が死にました。

大佐: そうです。しかし、ロシアには豊富すぎるほどの燃料があるので、全体の流れに変化はありません。問題は、それらのドローンがウクライナ領内からではなくロシア領内から発射されたということです。そのことで、メディアは「ロシアはここまで負けている」と騒ぎ立てています。

しかし、ほとんどのアメリカ人が理解していないことですが、ロシアは途方もなく広大な国だということです。つまり、その国境も膨大なものとなります。その全てを監視することは不可能ですから、実はロシアの国境のほとんどがオープン・ボーダーだということになります。だから、基本的にどこからでも潜入できます。コーカサスからでも中央アジアからでも潜入できます。これは今の場合に当てはまるとは思いませんが、潜在的にはフィンランド国境から潜入することもできます。したがって、少数のグループが国境を超えてロシア領内に潜入し、標的に近づいてからドローンを発射することが可能なのです。現場での最終的な調整と誘導も可能です。

ジャッジ: 数ヶ月前にもウクライナの破壊工作員がロシアに潜入し、プーチンの目と鼻の先で、自動車を爆破して乗っていたロシア市民を暗殺する事件がありました。

大佐: その通りです。しかも使用されたドローンはどれもかなり大きなものであったことがわかっています。そこで考えられる可能性の一つとして、ドローンは民間航空機を装って、その航路を飛んでいったのではないかという推測ができます。そしてそこに自動送受信無線機を乗せることもできたでしょう。それであたかも民間航空機であると思わせることができたのかもしれない。しかし、本当のことは私たちにはわかりません。これは現時点で収集した情報を照らし合わせた上で私が推測した一つの可能性にすぎませんから。しかし、民間航空機の航路を利用し、民間航空機を装うことで厳しいロシアの防衛監視網を掻い潜ったという説明はかなり有力なものだと思います。

ジャッジ: オーケー。では、いったい誰がそれを事前に知っていて、実行を許可したのでしょうか？

大佐: ジャッジよ。その一つ一つが大統領の耳に入っているかどうかは別として、現実の世界ではたくさん恐ろしいことが起こります。それを聞いて人々は震え上がるかもしれませんが、それが現実なのです。それを理解する必要があります。まず、国家安全保障アドバイザーがいます。そして、大統領は重要な決定事項を国家安全保障アドバイザーに委ねることができるという法律があります。それによって国家安全保障アドバイザーは大統領に代わって権限を行使できるのです。例を挙げると、国内での監視活動に関する権限です。国家安全保障にインパクトを与えることなら NSA、CIA、FBI であれ誰であれ、国内と国外を問わずそれを行使したくてしようがありません。もちろん、それは彼らがそれらの権限を行使できるという意味ではありません。

ジャッジ: ドローンの事件に関して、承認したかしなかったかは別にして、アメリカは事前にそれを知っていたのでしょうか？情報局のヘイ・ラングリーはウクライナの少数のグループがロシア領内に潜入し、民間航空機を装ってドローンを飛ばし、プーチンの家からわずか 200 マイル離れた燃料貯蔵基地を攻撃したという事を事前に知っていたのでしょうか？そのような事前のコミュニケーションがあったと思いますか？

大佐: CIA や NSA がそれを知っていたことは疑う余地がないと思います。しかし、いつどこから発射したとか、作戦の詳細についてどれくらい把握していたかは不明です。しかし、事件に関与していたことだけは確かですね。クリミア大橋爆破事件を覚えていますか？今では、SAS の犯行だったことがわかっています。SAS はイギリス情報局 MI6 の特別軍事部隊です。今回の燃料貯蔵基地攻撃が誰の犯行かはまだわかりませんが、攻撃を事前に知っていたことは疑いの余地がありません。

ジャッジ: ロシア情報局は攻撃を予測できなかったのでしょうか？

大佐: ロシア情報局が知っていたかどうかはわかりません。しかし、前にも言ったように、民間航空機を装うことでウクライナ軍は攻撃を可能にしたのです。少数のグループで潜入し、標的から 30、40、50、100 マイル離れた場所からドローンを飛ばした時、そして現場からコントロールしている時、標的になっている場所を予測することすら困難です。

ジャッジ: わかりました。ここで少し「お楽しみ時間」をとりましょう。

大佐: (笑) 確かに私たちには少しお楽しみ時間が必要だ。

ジャッジ: わたしたちのレギュラー・ゲストの一人で、「反対意見」の側にいる人物です。ジャッジング・フリーダム多くの視聴者が最も情熱を持って嫌っているジャック・デバインです。大佐はよくご存知だと思います。ジャック・デバインは 40 年間 CIA に勤務し、一時期、ロシアに関する情報収集のトップにいたこともある人物です。ここに彼にインタビューした動画から3つのカットがあります。それについて大佐のコメントをお願いします。まず、カット#1 です。「無能なロシアの情報局」についてです。

ジャック・デバイン(カット#1): ロシア人はウクライナ人の頑健さを過小評価していますね。私がアフガン・プログラムに従事していたときも、彼らは過小評価していました。人々は侵略されたものの悲しみと苦痛を過小評価していました。自分の家族が殺されたならば、天候が寒かろうが暑かろうがモノともしません。命を投げ出してもロシア人と戦います。侵略者は、そこに死を覚悟して戦う人々が待っていることを知っておく必要があります。侵略に関して、ロシアはまず情報収集の面で失敗していました。

長年にわたって戦っているのに、誰と戦うことになるのか知りませんでした。ロシア情報局の工員の中にはパレードのユニフォームを着て、ホテルの部屋を予約していました。彼らは侵略をかくも甘く見積もっていたのです。ロシアの情報局の無能ぶりをよく表していると思います。」

ジャッジ: ロシアの情報局がいかに無能であるかについて、ジャックはここで典型的な CIA の視点

を披瀝しました。

大佐:特別軍事作戦の開始について私たちは何度も話し合ってきました。あの時、プーチン大統領はいくつかのことを明らかにしました。まず、「市民の犠牲と市民インフラの犠牲を最小限にすること」です。そして非常に小規模な軍隊を投入して、可能な限りのソフトな戦術を展開しました。なぜなら、あの時、プーチンはその特別軍事作戦によってウクライナとワシントン交渉の席に引っ張り出すことができると考えていたからです。アメリカはウクライナの紛争が大規模な戦争に発展するのを避けようとするだろうと考えたのです。また、何十年もかかって築いてきたヨーロッパとの経済関係を傷いたくないと考えていました。しかし、プーチンのその考えは間違っていました。信頼に対して返ってきたのは裏切りと失望でした。彼はアメリカからもヨーロッパからもことごとく裏切られる結果となりました。ですから、わずか 20 万という小規模の軍隊で作戦を始めたのは、ウクライナ軍を過小評価したからではありません。ロシアにはウクライナを占領する意図が初めからなかったからです。ですから、「ウクライナ占領のためにロシアは作戦を開始した」というのは、あまりにも事実とかけ離れて大きな嘘です。ロシアにはウクライナ征服の意図は微塵もありませんでした。ロシアが望んだものは、ウクライナ国内にいるロシア人に対して他のウクライナ人と同等の法的権利の保証を求めたことでした。ドネツク・ルガンスクの二つの州の住民が人間の尊厳をもって扱われること当然の人権として要求したのです。なぜならドネツク・ルガンスクの人々のほとんどがロシア人であり、ロシア語とロシアの文化を持ち、それを学校でも教えることを望んでいたにも関わらず、一つも認められなかったからです。それはクリミアについても同じことです。1770 年代以来、クリミアが継続してロシアの一部であったという事実を認めてほしかったのです。そして、国としてのウクライナには中立であることを望みました。「ウクライナ征服の野望」という文脈はどこをどう探しても見つけることができません。パレードのユニフォームやホテルの予約だとかは、少し漫画的過ぎでしたね。しかし、彼は単純に CIA の嘘を宣伝しているだけです。退職した後も CIA に臨時採用されてサラリーをもらう道を探るなら、彼は CIA の嘘を宣伝し続ける必要があります。その同じ理由で、CIA は決して私を採用しないのです。

ジャッジ:それは確かに言えますな(笑)。さて、「いじめっ子プーチンの運命は今や風前の灯」というものです。あなたとあなたの CIA の同僚たちは「戦争のおかげで今やプーチンの運命も風前の灯となり、失脚するのも間近だろう」と言っていますね。それについて、3 月に書きました。同じことを今でも言い続けています。サイコロは投げられて、彼の命運はすでに尽きています。これからプーチンは目に見えて弱まっていくことでしょう。それは時間の問題です。しかし、私たちはそこに干渉してスピードを加速する必要はありません。ロシアの人々自身がそれをするでしょう。

ジャック(カット #2):外から下手に干渉するとかえって問題を拗らせることになるでしょう。

ジャッジ:たった一つだけ、彼はいいことを言いましたね。それについて私たちは彼に同意できると思います。それは私たちはロシアの国内のことに干渉すべきではないということです。彼の元の雇い主である CIA がその意見に同意するとは思いませんが。しかし、「いじめっ子プーチンは風前の灯だ」という彼の発言をどう思いますか？

大佐:私たちが今までずっとしてきたように、アメリカがある国を攻撃するとき、その国の元首を徹底的に悪魔化するのは、それは CIA の教科書の第 1 ページです。彼は CIA が言ってきた事をここでまた繰り返しているだけです。私は、むしろジャックがプーチンに対して優しすぎる事に驚いています。私はプーチンについてはもっと酷い中傷をずっと聞いてきましたから。マフィアのボス、犯罪の帝王といった類の悪口です。ジャックが言っているのは CIA の定番であり、スタンダードであり、ルーティンです。現実がどうであれ、彼はそれを言い続けることでしょう。ロシアの大規模攻勢が完了し、ウク

ライナにウクライナ兵が一人もいなくなった時でも、彼は「明日はモスクワでクーデタが起き、プーチンは失脚する」と言っていることでしょう。

ジャッジ:最後のカットに行きましょう。大佐、特に彼が話す最後の二つの言葉を注意して聞いてください。

ジャック(カット#3):冬がやってきた時、次のことが起きるでしょう。ロシアの人々は自分の周りを見回して「やあ、とんでも無いことになってしまった！経済はメチャクチャだし、軍隊は頓挫している！私はこんな戦争で死ぬのはごめんだ！」と口々に言っています。同じことがアフガンの時も起きました。あの時もロシア人は戦いたくなかったのです。ロシアが勝利することはありません。国を死守することで覚悟ができている相手に、戦う気持ちのない者が勝利することはできないのです。ですから、特別軍事作戦を始めた時点で、トラブルは始まっていました。ロシアの人々は「これはプーチンの**※FOLLY**だ！」と言うことでしょう。**※FOLLY:巨額の費用をかけた非常に馬鹿げた事業。後に愚かさの代名詞となった秦の始皇帝が建てた阿房宮に由来すると言われる英語。**

プーチンの FOLLY だそうです！大佐！（笑）

大佐:彼はおそらく麻薬産業に投資しすぎて、自分自身が麻薬中毒になっているのでしょう。

ジャッジ:ははははははは。

大佐:はっきり言って、プーチンの人気はゆるぎありません。反対に彼に寄せられる批判は、なぜもっと早くプーチンが徹底的な軍事行動を起こさなかったのかというものです。むしろロシアでは 30 万人の動員に加え、8 万人がボランティアで参加しています。これがロシアの現実です。ですから私はジャックの言っているタワゴトの意味が全くわかりません。彼はただ CIA の教科書の文言を繰り返しているだけです。**私は、ジャックはロシア人について何一つ知らないのだと思います。**

ジャッジ:動員された 54 万人がしっかりと訓練され、完全武装して東ウクライナからキエフに向かって西進を開始するまであとどれくらいかかりますか？

大佐:これは推測ですが、まず、キエフは第一の目標ではありません。現在、ロシアの大軍が三方の方角に集結しつつあります。一つは南ウクライナです。これはやがて北上するでしょう。ウクライナ軍は既に俎板の鯉で、料理されるのを待っているだけです。バクムートにいるのはウクライナ人ではなく、すでにそのほとんどが外人部隊です。ウクライナ人はもういなくなってしまったのです。ですから、ポーランド人やアメリカ人やイギリス人やその他のヨーロッパ人やスラブメニアン人を合わせて彼らにウクライナ軍のユニフォームを着せ、ウクライナ軍を装っているのです。それはロシア軍にとっては望むところです。もっとたくさんバクムートに入って来ればいいと思っています。そこで一網打尽にできますから。そして実際にそうなるでしょう。**いずれにせよウクライナにとっては絶望的です。**スロヴィキンが総司令官に抜擢された時、「戦闘の条件は全て事前に満たされなければならない」と言いました。

ジャッジ:スロヴィキンというのは誰ですか？

大佐:ロシア軍総司令官です。アメリカの四つ星将軍に匹敵します。この晩夏、あるいは初秋に彼が抜擢される以前は、各部隊はそれぞれ独立して行動していましたが、スロヴィキンが総司令官となったことで彼の下に統合されました。今は、スロヴィキンが絶対的指揮権を持っています。彼の周到な準備は 1942 年のマーシャル・モンゴメリーがエル・アラメインの戦いの前に準備した周到さに匹敵するものです。スロヴィキンは準備が完了するまでは決して作戦に着手することはないでしょう。は戦略的弾道ミサイル、クルーズ・ミサイル、ロケット・アーテリリィの全てを駆使して、ウクライナの指揮系統、エネルギー・グリッド、貯蔵基地、交通・分配インフラを含めた全てを破壊することでしょう。それを迎え撃つウクライナ軍は全く情けない状態です。今、ウクライナ軍が続けている必死の攻撃も長いことはな

いでしょう。ウクライナ政府は数百万の国民に対し、荷物をまとめ、西へ逃げるように言っています。もう、ウクライナ政府はガスも水道も電気も国民に供給できなくなったからです。もう国民を保護することができなくなったからです。それはロシア軍にとっても願ったり叶ったりなのです。なぜなら、ロシア軍は市民の犠牲を大きくしたくないので、市民が避難して空になってくれれば思う存分に作戦を展開できるからです。そういうわけで、間も無く、約 200 名ごとの小部隊に分かれたロシアの大規模攻勢を 2~3 のアキスで私たちは見ることになるはず。まず、ポーランドとキエフの繋がりを断ち切るでしょう。ポーランド国境とキエフとの間をロシアの大軍が埋め、そこに残っていたウクライナの拠点を完全に破壊します。それでポーランドを経由して入ってきた武器・兵力が完全に断ち切られます。

ジャッジ:それはちょうど、キエフを両側から挟み撃ちにするようなものですね。

大佐:そうです。最後の最後に回ってくるのがキエフです。ロシア軍はウクライナ軍を完全に破壊し、完全非軍事化を達成し、完全非ナチス化が達成する。ロシアが長い間ずっと言い続けてきた事です。ロシアは西側が擁護しているウクライナ・ナチスが消えるのを大人しく待ってはいません。そこでナチスを完全に一掃した後、ようやくキエフに目を向けることになるでしょう。しかしながら、モスクワにも一つ不安があります。そしてその不安は増大しつつあります。その不安とは、アメリカがあまりにも愚かなあまり、9 万の「夢の同盟軍」を「解放者」としてウクライナに送ることです。もちろん、ロシアはそんなものとは戦いたくありません。ロシアは、あくまでもアメリカ(NATO)とは戦いたくないのです。しかし、もし、私たちがその馬鹿をあえて犯すなら、私たちはそこで大量の軍隊を失うこととなります。その時、私たちにはもう代わりがありません。私たちには燃料がありません。私たちには部品がありません。私たちには弾薬がありません。なぜなら、もうすでにウクライナに全部やってしまったので、倉庫は空っぽだからです。それでもやる気になっている馬鹿は、ポーランドと私たちアメリカとルーマニアくらいなもので、それ以外の NATO は心の中で「冗談じゃない！」と思っています。しかし、ロシアが本当に心配しているのはその後のことです。なぜかという、軍隊を破壊され、何もかも失ってヤケクソになった私たちに残されているものがただ一つ核戦争だからです。ロシアはそれを心配しているのです。

ジャッジ:わかりました。飛んだ「プーチンの FOLLY」でした。大佐、どうもありがとうございました。

大佐:ありがとう、ジャッジ。

●ウクライナにおける「ゆで蛙」と米国の「ミッション・クリープ」(2022年11月12日)

ウクライナにおける米軍と NATO の軍事的エスカレーションとミッションクリープについて、「地上軍なし」から、現役の米軍部隊の地上勤務(おそらくはブーツ着用)までのメディア年表とその間のすべてを紹介する。— マーク・スレボダのザ・リアル・ポリティック

<https://youtu.be/pA24QLfa8Vs>

※安齋注:日本語の自動翻訳字幕を出すには、画面右下の右から 4 番目の「設定」をクリックして「字幕(1)」を選びます。次に、「英語(自動生成)」を選ぶと、「字幕(1) 英語自動生成>」と出ますから「>」をクリックすると「自動翻訳」という項目があります。これをクリックして「日本語」(一番下から2番目くらいかな)を選んで下さい。

この動画にあるウクライナに関するアメリカの発言のこの一年間の変化を、主にバイデン大統領の発言で追っていくと、次のごとくです。

2021 年 12 月 8 日:バイデンは、アメリカの地上軍をウクライナに派遣する考えは毛頭無いことをアメリカ国民及び世界に向かって明確にした。

2022年2月11日:バイデンは、もしアメリカとロシアが互いに撃ち合うようなことになれば、その時は第三次世界大戦だとNBCニュースで語った。

2月14日:アメリカは、ほとんど全てのアメリカ軍をウクライナから撤退させると言明。

2月23日:アメリカがウクライナ紛争に関わることは絶対でない、核戦争の危機は絶対に避けなければならないとペンタゴンが言明。

3月1日:バイデンが、ステート・オブ・ユニオンで「数千名のアメリカ軍ヨーロッパ駐留はウクライナで戦うためではなく、ポーランド、ルーマニア、ラトビア、リソニア、エストニアを含む同盟国を守るためである。そのためになら数千人規模を動かすだろう」と演説。

3月25日:アメリカが国民にひた隠していた秘密がバイデンのうっかり発言で明るみに！バイデンはポーランド駐留のアメリカ軍に向かってウクライナについて演説し、「そこであなた方は見ることになるでしょう。あなた方の中には既にそこに行っている人もいますね」と言った。

5月6日:軍事筋がThe Forbesに語ったところによると、アメリカ軍のトレーナーたちはすでにウクライナに戻っている。

6月25日:アメリカ政府及びEU高官がニューヨークタイムズに明らかにしたところによると、かなりの数のCIA工作員、米軍特殊部隊そしてヨーロッパ諸国からの司令官たちがウクライナ国内で、ウクライナ軍に情報とアドバイスを与え、衛星からの情報と武器支給をもとにこの代理戦争の指揮をしている。

6月27日:NATO 理事長ジェン・ストールンバーグが、「ロシアの脅威に対し、NATO 軍 30 万を最高警戒レベルに上げて準備していると発表。

9月1日:ウクライナのカウンター・オフensiヴに先駆けて、より多くの「限定的作戦」を奨励したことを、ペンタゴンは公にした。

9月29日:ウクライナ紛争の監督と支援のために、ドイツにアメリカ合衆国の軍事指揮系統を新たに設立したと、ペンタゴンは公にした。

10月5日:ウクライナ国内においてアメリカの秘密作戦が進行中であると、アメリカ情報局の高官が匿名で the Intercept に漏らした。2月にロシアの特別軍事作戦が始まった時に比べて、ウクライナ国内のCIAと特別工作員の数が増大している。作戦は※プレジデンシャル・コーバート・アクション・ファインディングの下で実行されている。※CIAの秘密作戦を承認してもらうために大統領は議会のある委員会に報告の義務がある。

10月21日:①ポーランド外務大臣で、EU 外交の重要人物ジョセフ・ブレルと前 CIA 長官ディビッド・パトレイアスとその他の西側政府の高官たちは口を揃えて、NATO 軍が国境を越えてウクライナに入り、圧倒的な通常戦力をもってロシア軍を殲滅するという極端なエスカレーションの可能性について話した。10月中旬:②アメリカ統合参謀本部議長のマーク・ミリーは「Rules-based order(アメリカの秩序に基づく支配)が、ウクライナで危機に瀕している」と語った。10月中旬:③NATO 理事長ジェン・ストールンバーグは「ロシアの勝利は、NATO の敗北を意味する。それゆえ、ウクライナは勝利しなければならず、NATO は長く、費用のかかる戦争の準備をしなければならない」と語った。

10月21日:CBS レポーターがアメリカ第 101 空挺師団司令官にインタビューしたところ、ルーマニア駐留のアメリカ軍歩兵部隊数千名がウクライナ国境からわずか数マイルのところ、ロシア軍との戦闘を想定した実戦モードの訓練をしていることが明らかになった。間もなく、彼らは黒海の重要な港湾都市ミコライヴを死守すべく、ウクライナにオデッサ付近に派遣される予定であることを明らかにした。

10月29日:①ロシア国防省は、黒海のロシア船籍に対するドローン攻撃にイギリス海軍特殊部隊が直接関与していたことを非難した。また、その実行部隊はノードストリーム・パイプライン破壊の実行犯と同一犯であったことを明らかにした。The Grayzone に漏らされたイギリスの機密文書から、イギリス軍情報局がクリミアにおける破壊工作・テロ行為を直接組織していたことがわかった。

10月29日:②アメリカ軍ディビッド・パトレイアス将軍が、ウクライナに直接武力介入するため、アメリカ主導の有志軍編成を公式に呼びかけた。有志軍に参加する国は、イギリス、ポーランド、ルーマニアおよびバルト三国である。ダグラス・マクグレゴア大佐は、このロシアに対する戦争と徐々に破局に向かって近づいている動きに警告を与えた。

10月31日:アメリカ合衆国国防省高官が、数は明らかにしないが、(兵器調査を目的に)現在、アメリカ軍が公式にウクライナ国内に駐留しているとワシントン・ポストに語った。「兵器調査を目的に」といった類の嘘は、イラクでもシリアでもベトナムでも繰り返し聞かされてきた同じ嘘である。こうしてメディアは全力で戦争を準備し、人々は知らない間に完全な戦争モードにシフトしている。これを MISSION CREEP(忍び込むミッション)と呼ぶ。